

徒然草

ネパール人から学ぶ肩の張らない生き方

湊 直信

国際大学大学院客員教授

ネパールという国や様々なネパール人と付き合っ 26~7 年になる。ネパール人と言っても一様でなく、多くの民族から構成されており、顔立ちも多様である。大雑把に分けても、浅黒く彫の深い北インド南部低地民（アーリヤ）とチベット系山岳民族（モンゴロイド）が存在する。前者はネパール南部に住み、現在のネパール語を使用してきた人々で、僧侶カーストで教員、官僚等が多いブラフマン、軍人カーストのチェトリ等であるが、多くはヒンズー教徒である。後者は昔から山岳部に居住してきた人々で、タマン、グルン、タカリ等の民族でそれぞれの言語を持っている。国連軍や英国の軍事基地へ派遣されているグルカ兵も多く輩出している。山岳部に居住するシェルパ族は登山家のガイドや運搬の仕事をする傾向にある。ヒラリーと共に世界で最初にエベレストに登頂したテンジンはシェルパ族である。また、カトマンドゥには、古くから居住してネワール語を使用し、商業や工芸を職とする都市型市民のネワール族がいる。それぞれ、自らの民族に対して強い誇りを持っている。以下、日頃のネパール人との付き合いから、日本の硬直した制度や社会規範を改善するために、参考となるかもしれない知恵や考え方を述べてみたい。

まず着目するのは彼らの知恵と工夫である。ネパールでは財、サービス、経済社会インフラ、制度が不十分であることが多い。水、電気、便利な交通手段、質の高い保健サービス、初等から高等までの良い教育は、地域によっても異なるが、一般的には不足気味である。しかし、その様な困難な環境の中でも、人々は悲観せずに人生を楽しんでいるように見える。何でも整備されている日本の社会では育たないような独特の創意工夫や知恵から学ぶことは大きい。例えば、電気がない村や停電の多い場所では、明るいうちに仕事を済ませ、暗くなってからは油の灯籠の下で会話を楽しみ、9 時ごろには寝てしまう。水が無い時には、大根などの水分の多い野菜を使って料理をする。村落部では燃料が不足気味の時には、昔から干した牛の糞を燃やして燃料とする。ネパール人のサバイバル術が如何なく発揮されたのが、東日本大震災の直後である。仙台の近くで被災したネパール人グループは電気が止まった中で、まず瓶に油をつめ布を通して手製のランプを作った。次に、石や煉瓦を使ってカマドを作り、落ちている木材等を集めて燃料とし、これに鍋を置いてご飯や野菜を炊いた。このネパール式のサバイバル法を周囲の日本人にも教えた。

彼らは助け合う精神を持っている。ネパールでは生命保険や損害保険といったリスクに備えた制度は発展していない。その代わり、家族、親戚、友人、コミュニティの人々と助け合う。互いに何でも気楽に頼み、気楽に引き受ける。物を頼むのに遠慮しない

し、出来ることを引き受けるのには躊躇もしない。「お互い様」の精神が深く根付いている。既に絆社会がしっかりと出来上がっていると言える。

ネパール人の異質なものを受け入れる受容性は非常に高い。恐らく、多民族社会として、常に言語、習慣、宗教、慣習が違う人々と共存してきた経験から、自分たちと違うということに対する違和感はあまり感じないのではないかと想像する。宗教はヒンズー教とラマ教（仏教の一派）が普及しているが、双方の軋轢は少ない。ヒンズー教は多神教であり、多くの神々の中に仏陀も含まれているからだと思う。多様性はグローバル社会の特徴の一つでもある。

ネパール人は多かれ少なかれ自分の運命が予め決められているとの感覚を持っている。ネパールのヒンズー教では子供が生まれた時に、僧侶を家に呼んで子供に名前をつけてもらい、チナという一片の紙を作ってもらう。そこには、その子供の一生に関しての（多分、大雑把な）運命的な傾向が書かれている。そのチナは家で保存し、学校、病気、結婚などで僧侶に相談するとき、僧侶はチナを見ながら相談にのる。人々は予め運命で決まっているから、心配しないで良いとの楽観的な人生観をもっている事が多い。これは諦めではなく、自分の運命に従って自分らしく生きようという建設的な人生観であると思う。日本は毎年3万人以上の自殺者がいるが、ネパールで自殺する人は少ない。ネパール人の友人に聞いたところ、ネパールでは個人が深刻な問題に直面すると他の人々に相談して、皆でその問題を解決しようとするから、深刻に思い悩まずに済むということであった。

ネパール人は話好きである。男性も女性も友人や知人と熱心に情報交換する。情報は瞬く間に広がる。この情報の重視は、カトマンドゥが歴史的に市場として発達したためかも知れない。南のインド、北のチベットを始め、シッキム、アッサム等から様々な物品が集まり、それらを交換することで市場が成り立っていた。市場で仲介業を行うためには、商品やその値段に関する情報の重要性が高かったものと思われる。ネパールでは電話網の発達が著しく早く、現在では携帯電話やネットでの情報交換も非常に活発である。

以上のように、ネパール人の知恵と工夫、助け合う精神、違いを受け入れる受容性、運命論と楽観性、情報の重視、といった肩の張らない生き方は、グローバル時代における日本の社会の在り方を考える上で大いに参考になると思う。